

Title	クルト・トゥホルスキー「ヨコのジャーナリズムとタテのジャーナリズム」(1925)
Sub Title	Kurt Tucholsky : Horizontaler und vertikaler Journalismus (1925) (Übersetzung)
Author	山口, 祐子(Yamaguchi, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.63 (2023.) ,p.21- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20230331-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(翻訳)

クルト・トゥホルスキー 「ヨコのジャーナリズムと タテのジャーナリズム」(1925)*

山口 祐子 訳・解題

旅行記は、第一に書き手の人となりを書き記すもので、旅の特徴を記すものでない。著者が何に驚くのか、さらに言えば、著者が何に驚かないのか——というのも、人が当然だと考えていることほど、その人となりを表すものはないのだから——、彼が何について笑い、何について悲しく思うのか。著者による、冗談めかしたりもったいぶったりしながら加えられる注釈の数々や、風景の描写。こうした事々は、まず著者自身をあらわにする。

異国趣味の旅行記に登場するどうしようもない冒頭のことを思い浮かべてみよう。書き手が、ヨーロッパの出港地や北方の水域など検証可能な場所にいる間、彼は、大抵あまりにも浅はかで、あまりにも不快なユーモアをちりばめ、あまりにも愚かであまりにも狭い見方で描写するものだから、彼のタンガニーカ湖についての報告も、やはり極めて胡散臭いものに見えざるをえない。

* テキスト：Ignaz Wrobel (Kurt Tucholsky): Horizontaler und vertikaler Journalismus, in: *Die Weltbühne* Jg.21, Nr.2, 13.1.1925, wieder in: Kurt Tucholsky: *Gesamtausgabe. Texte und Briefe*, Band 7 (herausgegeben von Bärbel Boldt, Andrea Spingler), S. 26ff. 以下、全集に関する情報は (GA 巻号 / 頁数) と記す。なお訳注の作成にあたり、全集第7巻の注釈及び索引を参照した。

ところで、これは才能の問題だけではない。なによりも報告者の属す階級の問題だ。自分の肌から抜け出せる者はいない。自分の階級から抜け出せる者は、ほんのわずかしかない。

シャレク女史¹⁾は世界中を旅することができるが、彼女はずっと、小市民的で偏狭な、そして決して趣味が良いとは言えないウィーン人、つまり彼女その人のままだろう。私はケーテ・シルマッハーのパリに関する小冊子²⁾を入手したが、この本に書かれていることが正しいかどうかは、いずれいくつか試してみたいものだ。この本からパリについて知ることはほとんどできないが、気おくれと雨傘が手放せない、こうるさいプチブル女性の物の考え方は極めてよくわかる。このようなヨコのジャーナリズムは、何の役にも立たない。

平均的なドイツ人判事が北京勤務になろうとベルリン勤務になろうと、同じことだ。彼は大抵の場合、やはりまた自分の属す階級で暮らすことになるだろうし、多かれ少なかれ上流市民の立場から、異国の社会構造や経済構造、社交界の構造を眺め、彼のものの見方に合った報告をするだろう。シャルロッテンブルクであろうとモロッコであろうと、産業プロレタリアートならあくせく働くものだというのと、たいして変わらない。そして、アメリカの裕福な有閑マダムが活動する場は、マダガスカルからパリを経て東京に至るまで、まったく変化しない。国旗の色は入れ替わっても、そこがホテルのロビーであることに変わりはないのだ。

このことは、現代文明と経済開発が諸国間の差異を解消し、ある種の機械化をもたらしてしまっただけに、一層重要である。当然、人種や国民性の違いを否定することはできない。だが、こうしたローカルな独自性の

- 1) アリス・シャレク Alice Schalek (1874-1956) : オーストリア出身のジャーナリスト。1903年よりウィーンの『ノイエ・フライエ・ブレッセ』誌文芸欄編集者として活動、第一次世界大戦の従軍記録で知られる。1920年代には日本も含む東アジア訪問記を出版していた (GA7/612)。
- 2) ケーテ・シルマッハー Käthe Schirmacher (1865-1930) による紀行文 *Paris!* (1900) を指す (GA7/612)。

数々は、あちこちですでに物事の背景に追いやられてしまった。そして人々の経済的な暮らしぶりや、その消費や収益の状況は、根本的な点で実に似通っている。賃金に関する法律は、最後はどこでも同じ、どこでも労働者は搾取され、どこでも、労働者は支払いに見合うよりも多くの労働力を盗みとられる。そして、平均的なサラリーマンが自分の一生分の仕事について十分な対価を得られるような国は、どこにもないのだ。ヨーロッパに関して言えば、エッフェル塔や、レーザー&ヴォルフ葉巻工場やウェンブリー・スタジアムとまったく違う何かを見つけようとしたら、スペインの奥地へ行かねばならないだろう。あとはもう、境界標によって分けられているものなどは、階級による区分ほど明確ではない。

同じ階級の者同士が、異なる国々で異なる風習や異なる偏見を持つことは、防ぎようがない。しかし、もっとはるかに深く眺めてみるとどうだろう。娯楽、色恋沙汰、読み物に至るまで終始一貫して、彼らの暮らしは、経済的な状況によって決定的に左右される。

我々が目にしているのは、旅の報告者に、自分の所属する社会階層に留まったまま場所を移動させるという、ヨコのジャーナリズムである。シュルツ氏はローマに、ヤング氏はベルリンに転勤になる。それで何が起こるか——？彼らは、異国で、電車の運行法や物価、家の建築方式や商店のようすを、それぞれの祖国にあるものと比べるが、いつだって、彼らが慣れ親しんだものの見方に基づいて比べるのだ。そして彼らは、驚きで目をみはる故郷の人々にむけて、こんな報告をする。「私はこれまでこの世界にいて、同胞のみなさんの中において、何者であったでしょうか？馬一頭を持っていた、ちっぽけなラポソでした。しかし今はどうでしょう？偉大なるラポソは、聖地巡礼を果たし、遠く離れた宿で夜を明かしてきたおかげで、周囲を圧倒し、地理学協会で大口をたたくことができたのです。」だいたいこんな一節が、ケイロースの優れた小説『聖遺物』³⁾にある。さしずめ

3) ポルトガルの外交官でもあったエッサ・デ・ケイロース José Maria de Eça de Queiroz (1845–1900) によるこの小説は 1918 年にドイツ語訳が出

遠く離れたホテルにいたおかげで、だ……。ヨコのジャーナリズムから見えてくるものは多いが、一番肝心なことは見えない。

我々より上の階級や我々の下にある階級の人々の記録に比べたら、中国での冒険譚など何だというのだろう！我々は、異なる階級の記録についてほとんど知らない。読書するプロレタリアートは、裕福なドイツの商家の暮らしぶりについてより、中央アフリカの事情のほうに詳しいし、教養のある市民は、雇っているお針子の懐具合より、インドシナ情勢のほうに詳しい。労働者詩人が富裕層の生活習慣をどのようにイメージしているか一度でも読んでみれば、彼がどれほど窮屈な思いで暮らしているか、推し量れることだろう。そして、彼のこうした無知は、ブルジョワの女性小説製造業者たちが書く本に登場する、労働者として暮らすことについての無邪気な記述とほぼ変わらない。だから最近の風刺は、ほとんどすべての的外れになる。こんな成金はいないし、風刺雑誌で絵に描かれるような、あんな判事はいない。唯一ジョージ・グロスだけは、敵があまりに危険であるために、彼らを模した人形を作って射撃の的にしてよいのだということを、わかっている。彼らは、カリカチュアよりも実物のほうが、もっと卑劣だ——とにかく全然ちがう。一番効果的なのは、これからも、写真だ。

タテのジャーナリズムには、ほんのささやかな糸口がある。上昇したり下降したりする報告文のことだ。下降の試みは、ここかしこで、感傷的な中産階級のジャーナリストたちが実践している——ハイエルマンズ⁴⁾は、

版された。トゥホルスキーは1925年5月、『世界舞台』誌上に同作品の書評を載せている（GA7/243ff.）。

- 4) ヘルマン・ハイエルマンズ Hermann Heijermans (1864–1924) はオランダのジャーナリストであり著述家。自然主義的・社会主義的な劇作品や小説で知られた。1907年から12年にかけて、ベルリンで『フォス新聞』や『ベルリーナー・ターゲブラット（ベルリン日刊新聞）』の寄稿者として活動し、彼が1910年9月9日から12日にかけて『ベルリーナー・ターゲブラット』誌上に発表した連載シリーズ「精神病院24時」はセンセーションを巻き起こしていた（GA7/613）。

とてもうまくやっていたものだ。しかし、ホームレスの収容施設で6時間眠ったからといって、浮浪者の女性の暮らしを根本から理解したことには、まだならない。このような暮らしは深刻で、容赦なく、そして一回限りのものだからだ——それに、時間単位で雇われている観察者は、すべてが興味本位のものにすぎないことを心得ていて、自分の家にはゆったりとしたベッドが待っていて、いつでもこの変装ごっこを止められるのだなどと、仕事の間中、ずっと考えている。そんな者には、決して他人の生活感情を集中的に理解することなどできないだろう。短期間では、このような行動は社会的カーニバルのままだ。アメリカには、もっと真剣な試みもある。かの国では作家や作家以外の人々が、そのような潜伏調査をいくつもおこなった。彼らにとってこのような調査は、はるかに真剣なものだった。自身の経済状況も決して良いとは言えない人々が時間を割き、真相に迫ったのだから。

上流階級を取材するために、新聞各紙は、控えめな報酬ですむ遊び人の紳士淑女をおさえておく。彼ら彼女らは、富裕層の舞踏会に出かけ、末席から際限なく媚びを売ったおかげで、ロンシャン競馬場で競馬を一緒に見物することを許されたり、チップすら月ぎめでもらえるわけでもないのに、恩給や金利で生活している者たちの豪華な暮らしぶりについて、仰々しく故郷へ電報を打ったりする。

これもまた確かに大変だ。際限なく高い経費を払って、ある人を富裕層へ派遣しても、その人が二度と戻ってこなかったり、しまいにはあちらで嫁や婿にとられてしまったりする恐れがある。そして仮に善意の人であったとしても、その人がアウトサイダーであるという理由で受け入れられないかもしれないし、あるいは作法を心得ていなかったり、コネクションを持ってなかったりすることもある。貧困層へ派遣する場合は、その人が何年もそのような困難に耐えられるのか、そしてそこでも知的な労働が可能で、そしてただの部外者に留まらずにいられるか、という問題がある。回想録によって我々を喜ばせるのは、排斥された者や、成り上がり者たちなのだ。

そして詩人たちも。だがこれはかなりいかがわしい案件だ。というのも、いまだかつて階級など存在しなかったかのようにふるまおうとするなら、虚構の、先入観を排した「芸術」へと逃げ込むだけでは足りないからだ——それに、そこでなにか真っ当なものを見つけたければ、ずっと高みに上らなければならいだろう。

異なる階級の者同士は、互いのことを多くは知らない。イギリスの鉱山労働者の一日や、ポーランドの競馬馬の厩舎のオーナーの一日について述べるのは簡単だ。しかし両者に特有で、他に記しようがない生活感情（ある無産市民のそれと、ある将来を約束された者のそれ）は、ただ直感的にイメージされるだけか、いずれか一方によって、——この場合ほとんどの場合「元」がつく——労働者か、あるいは伯爵によって、信憑性のある情報として記されるかの、どちらかだ。そしてそういう人たちは、たいいていものを書くことができない。

昨今のヨコの旅行ジャーナリズムが発信するものは、大抵退屈で、せいぜい書き手の人柄のおかげで成り立っているにすぎない。アメリカにいたとしても、書き手にとってそれほど多くが得られるものではない——それで十分かもしれないが、多くはない。そんなわけで、書き手は、多くの場合ロマンティズムを悪用してきりぬける。

これにはやや幻滅させられる。経済的には、色とりどりのイメージの後ろに隠されていることを、ただはっきりと述べればよいのだ。そうすれば、このような魔法はすっかり解けてしまうだろう。マルクスの教義には確かに大いに教条的などころがある。しかしあの茫漠としたイデオロギーに比べれば、対案としてはとても健全だ。かれの教えは、生活感情がますます組織や文明の陰へと後退しているからこそ、むしろ応用できるだろう。フランツ・メーリングが、彼の『レッシング伝説』の中でフリードリヒ2世を純粹に経済的に解釈しているというなら、そんな解釈は、メーリングがショーペンハウアーについて「年金哲学者」と評したのと同様、我々にはつじつまの合わないものにみえる。この呼び方には、たしかに幾

分かの真実があるとはいえ、このようなものの見方はあまりに偏狭で、不十分だ。ドイツの地方判事がスペインの娼家について記した事務的な描写などは、異論の余地がないものかもしれないが、そのような文章には、いつもどこか馬鹿々々しさが付きまとうだろう。書き手が現地の雰囲気把握できていないからだ。とはいえ、文明国家の今日の暮らしぶりについてロマン主義をはき違えたような描写をするのも、全くもって間違っている。ひたすら美辞麗句を削ぎ落とし、冷静に確かめなければならない。当地の労働者の週給はこれこれしかじかの額、支出はこれだけ、結核による死者数はこれだけ、労働時間はこれこれしかじか、などなど。こうしたことは、30回ヴェスヴィオ火山に登るより、重みがある。階級を移動する旅より激しい変化をもたらしてくれる旅は、ほかにないのだから。資金が変われば、世界観は一変する。

あなたがたは皆、階級に応じて容赦なく分類されながら、互いに隣り合っ
て暮らしている。お互いに間違ったイメージを持ちながら、何も知らず、
何も知ろうとしない。

支配階級が、本当に、労働者の心の中がどうなっているかを知れば、都市生活者にも農民が本当に抱えている不安を共有することができ、また農民には都市部の浅薄な大衆を理解することができたなら——。彼らはもしかしたら互いに助け合うかもしれないのに。大抵の人間が持つ残酷さは想像力の欠如にあり、彼らの残虐性は無関心にあるのだから。

尤も、プロレタリアートが、本当に、「上で」何が起きているのかを知ることにでもなれば、彼が、株式仲買人や、工場主、大地主が、彼を使って何をしているかを知ってしまうとすれば——彼がそれに気づいてしまったら、ただ知るだけでなく、いまだかつて彼がドイツで起こさなかったことを行動に移してしまうだろうけれど。それは、「革命」だ。

解題

ハイパーインフレーションが収束しつつあった1924年、トゥホルスキーは『世界舞台』の編集主幹ジークフリート・ヤーコプゾーンの尽力でベルリンからパリに居を移し、4月から『世界舞台』と『フォス新聞』の在外通信員として、本格的に文筆活動を再開する。『フォス新聞』には主にペーター・パンターの筆名で文芸時評やフランス事情について書き、『フォス新聞』の発行元であるウルシュタイン社の系列雑誌にも娯楽的な文章を寄せた。読者層の点でいえば、パンターことトゥホルスキーもまた、ウルシュタイン社に雇われた「ヨコのジャーナリスト」であった。

本稿は、1925年1月13日発行の『世界舞台』に、イグナーツ・ヴローベルの筆名で発表された。ヴローベルは、トゥホルスキーの主要な4つの筆名のうち、辛辣な社会批評や政治的論考を発表する際に用いられていた名である。原稿は1924年7月の時点で完成していたが、ヤーコプゾーンの判断でしばらく掲載が見送られた。ヤーコプゾーンによれば、本稿はこれまでにトゥホルスキーが「書いてきたものの中で、二番目に弱い」⁵⁾もので、冷たく、平板に書かれており、書かれていることはすべて真実だが、一度書けばよいのに三度も繰り返しているという⁶⁾。最終的にヤーコプゾーンは本稿を掲載するが、その号には、テーオバルト・ティーガーの筆名でトゥホルスキーが書き、格差社会を伝える詩「安寧と秩序」も同時に掲載された⁷⁾。分かりやすいメッセージ性を持つ詩と比べて、当時の西

5) Jacobsohn an Tucholsky vom 24. Juli 1924, in: Siegfried Jacobsohn: *Briefe an Kurt Tucholsky. 1915–1926*. Herausgegeben von R. von Soldenhoff, Reinbek (Taschenbuchausgabe) 1997, S. 204.

6) Jacobsohn an Tucholsky, S. 212.

7) Theobald Tiger (d.i. Tucholsky): Ruhe und Ordnung (GA7/31f.). ただし、この詩については作者であるトゥホルスキーのほうが不満であったようだ。ヤーコプゾーンは同作について、トゥホルスキーの「時期を逸した詩だ」との考えを認めたくうえで、「私にとっては十分な出来だ」と述べている。Vgl. Jacobsohn an Tucholsky, S. 251.

欧でブームとなっていた異国趣味の旅行記を揶揄することから始まる本稿には、ヤーコプゾーンの指摘するように、辛辣というより冷笑的な筆致も目立つ。しかし、グローバル化と同時に進行する社会内部の分断こそ克服すべきものとする視点は、トゥホルスキーならではの複眼的思考によるものといつてよい。

1929年、トゥホルスキーはジョン・ハートフィールドとの共作により写真集『ドイツ世界に冠たるドイツ Deutschland, Deutschland über alles』を共産党系のマリク出版から発表するが、この作品は、いわば「ヨコのジャーナリスト」による「タテのジャーナリズム」の試みとしても読める。テキストを担当したトゥホルスキーは、対象をグローバル（インターナショナル）な「世界」ではなく、故郷である「ドイツ」に限定した。このユニークな写真集で示されたのもまた、断片化し、分断された社会で互いに行き来することのない人々の無知への警鐘だった。